

MCLS に対する治療状況及び手技傾向の検証

【はじめに】当院では積極的に川崎病患者(以下 MCLS)に対し、PCI を施行している。原則は Rotablator(以下 Rota)による切削のみであるが、状況に応じて Stent を留置する場合もある。

【目的】MCLS に対する治療内容の検証及び傾向に関して検討する。

【対象及び方法】2007. 3. 1～2019. 3. 31 に MCLS にて治療を施行した 74 件(男性 61 名・女性 13 名・平均年齢 24.8 ± 12.6 歳:最少年齢 8 歳)を対象に、治療内容・治療部位・CABG 歴に関する検討を行った。

【結果】使用したデバイスは Laser:1 件・Rota:58 件・POBA:35 件・Stent:22 件・DCB:3 件であり、Rota を予定していない症例が 16 件(内、Wire 不通過 2 例)あったため、Rota 使用率は 100%であった。Stent を用いた症例と非挿入症例の比較では、Stent を挿入した患者の平均年齢は 35.7 ± 11.9 歳と高く有意差が得られた(非挿入 19.3 ± 8.5 歳)。治療部位では RCA 及び LAD が共に 40%程度あり、LCX は少ない傾向であった。CABG となった患者は 3 名で平均年齢 44.7 歳と、未成年及び青年期の手術は回避されていた。

【考察】Stent を留置した患者は 1 名を除き 20 歳以上であり、CABG となった患者は最年少で 34 歳であった。このことから、Rota を施行することで、早期の Stent 留置や CABG を回避できたと考える。

【結語】MCLS に対し Rota を施行することで、Stent 留置や CABG を回避又は遅らせる可能性が示唆された。また、小中学生の患者に対し Rota を施行したことで、狭心症状なく運動制限が解除されるケースもあるため、有用性が高いと判断できる。